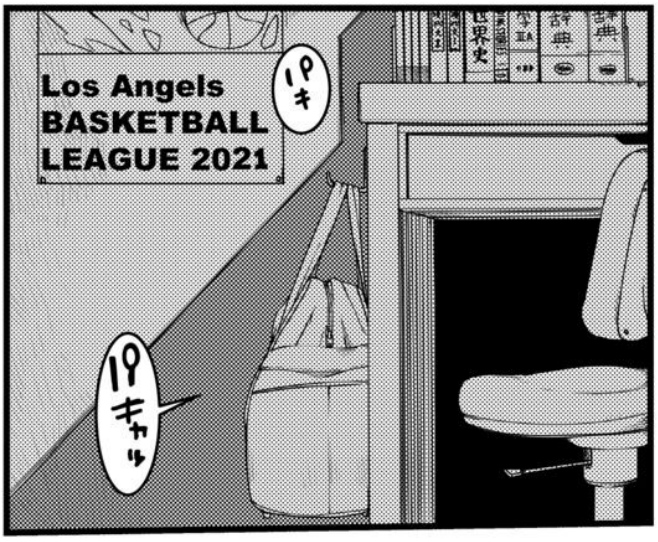
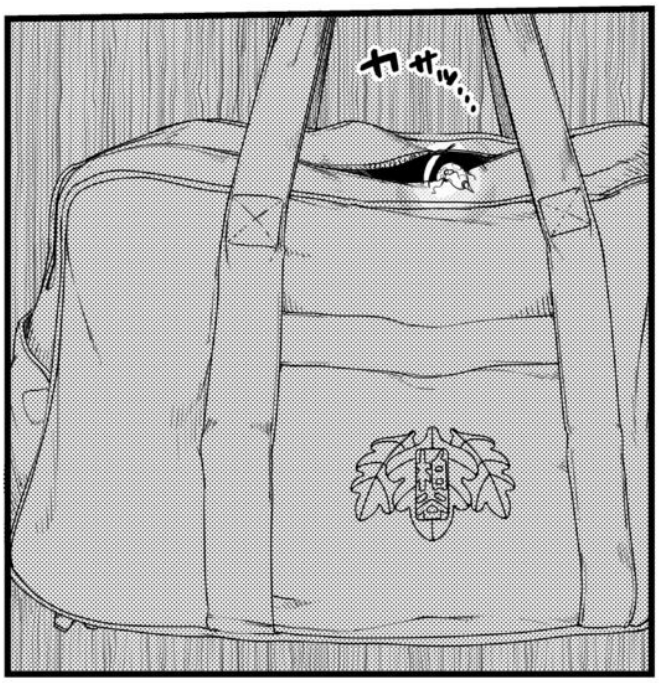
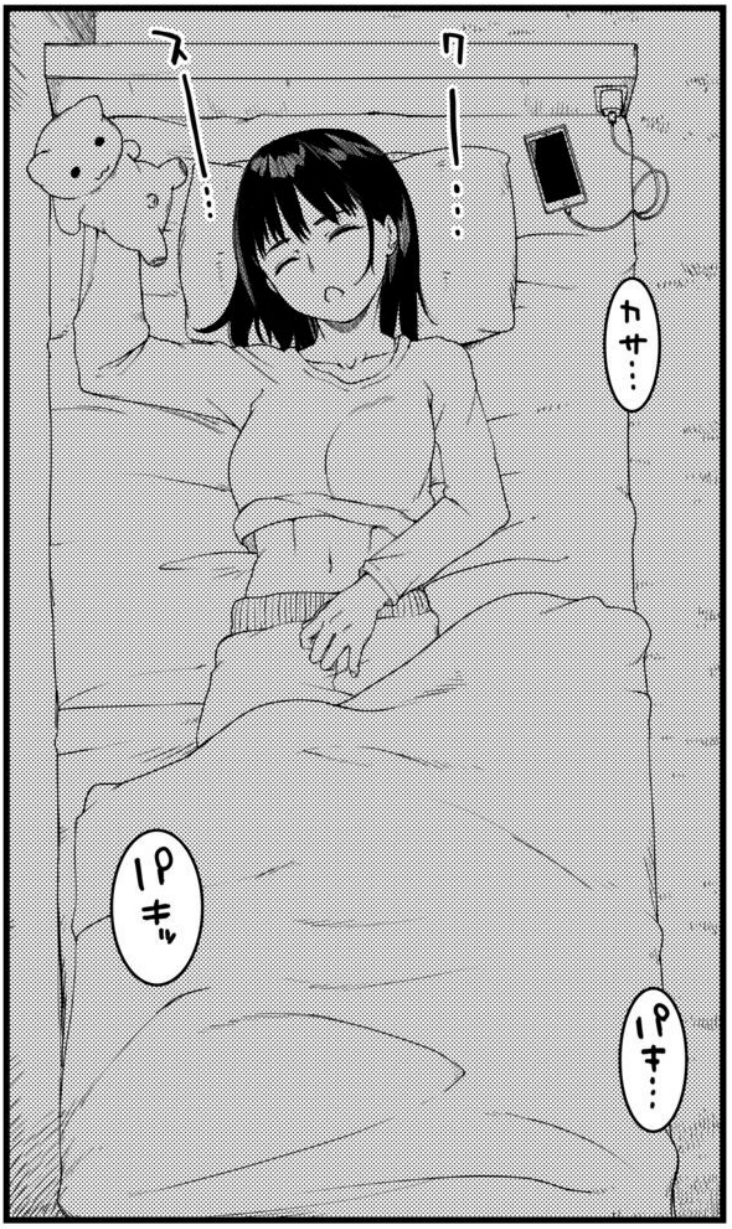
第１話

蝕まれた花園
-Parasite School-

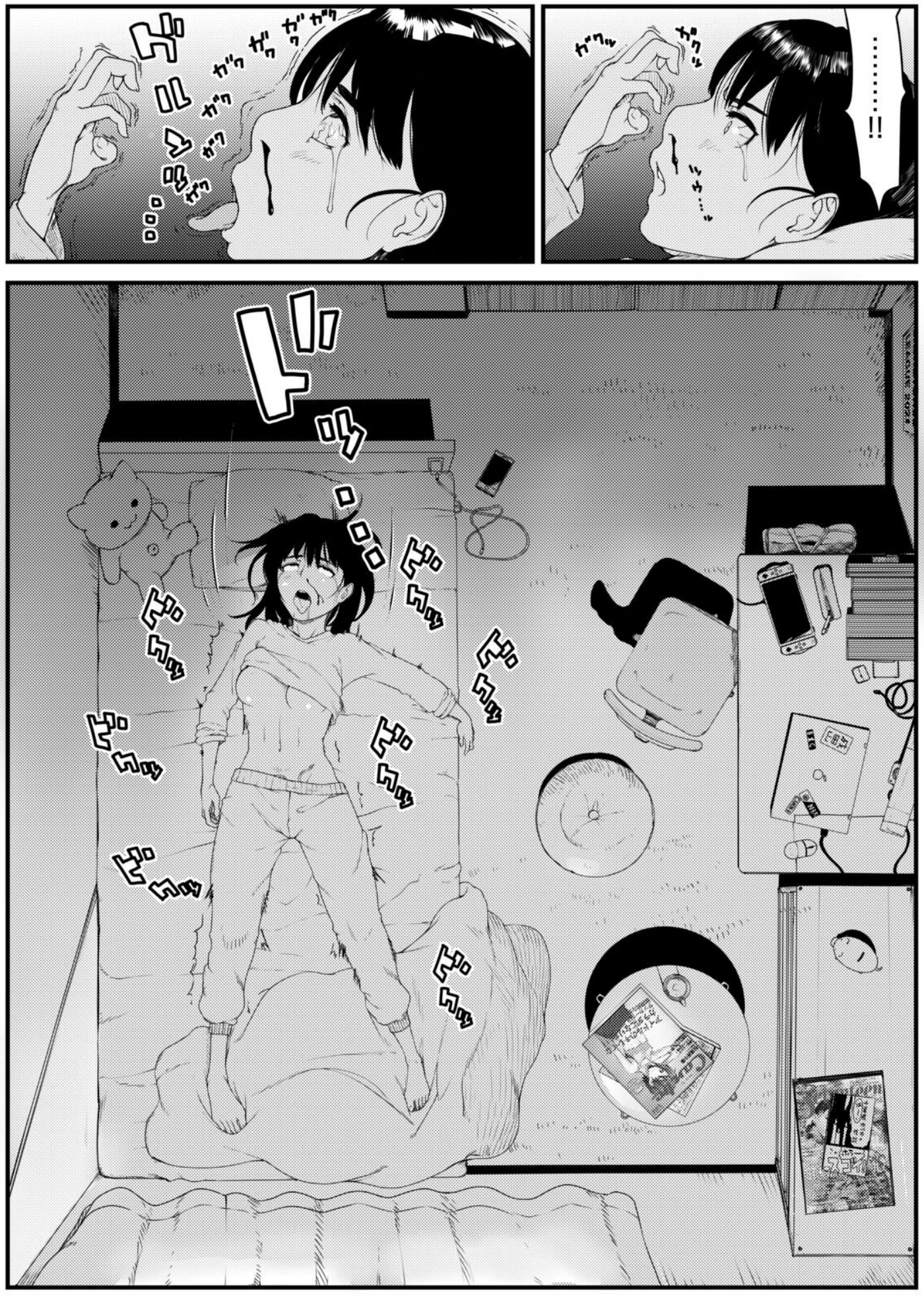
原作・スイレン　作画・湖月神無


Los Angels
BASKETBALL
LEAGUE 2021
ピキ
ピキャッ


カサッ…


フ
ワ…
カサ…
ピキャッ
ピキ…

ズルゥ
ン…
ヤサササッ
ビクッ
ひ…ッ!!
ビクビク
しゃる…


……!!
ガクッ
ガクッ
ガクッ
ガクッ
ガクッ
ガクッ
ガクッ
ガクッ
ガクッ
ドリル
ドリル
ドリル
ドリル
ドリル
ドリル
ドリル
ドリル
ドリル

ピピッ
ピピッ
ピピッ
アラーム
5:30
ピピッ
ピピッ
ばちっ
はっ
わ…
鼻血…
何だっけ…
何か怖い夢
見たような…
うーん…
思い出せん…
まいっか！
あら美紀
今朝はよく
食べるわねぇ
なんだか
お腹空い
ちゃって…
お母さん
コレおかわり
ある？
あらあらw
やっぱり
育ち盛りねぇ
やっつば
学校遅れるじゃん
行ってきます!!
ってうわあ!!
もうこんな時間!?

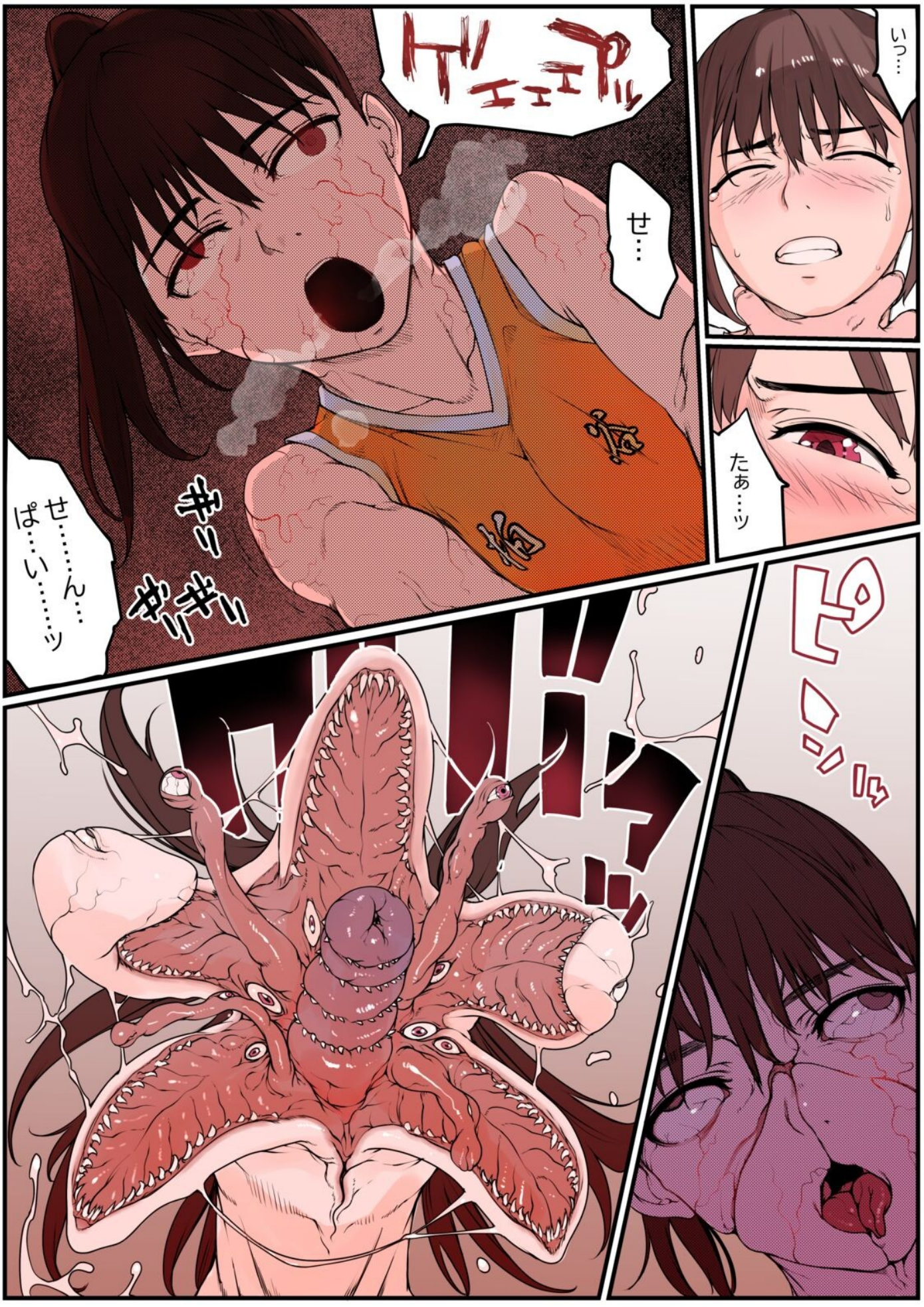
いっそげー！
ナビナビナビ
笹山 美紀
バスケ部キャプテン。
明るい性格で人望も厚い。
……
…へ？
ナビ。。。
ベンベンベンベン
何でもう
お腹減るの？
あーもう！
急いでるのに
いい！
THREE&SEVEN
24h
よし！
カッ！
ひほはなは！
（急がなきゃ）
もぐっ
もぐ
タタッ…
ガサ
ガサ
キーン
コーン
カーン
コーン

で…次のページ
一九一七年…
かの有名な
革命により
当時の皇帝は…
わ…
――で、
この関数を処理して…
こうなりますね
ここから
導かれる
数列の極限は…
う――…
よし、
じゃあ次の
行から…
誰かに訳して
もらおうかな
今日は七日だから…
腹減った…
あ――…
やっと授業
終わった…
お弁当
全然足りな
かったし…
女子バスケ部
部員大募集
部活の前に
最後の
チキン食べとこ…
先輩！
モグッ
モグッ
モグッ
AIR
POINT
美紀先輩！

先輩
お疲れ様
ですっ！
真央…
伊村 真央
美紀の1年後輩。
健気で優しい性格。
いーなー
何食べてるん
ですか？
お…お腹
減っちゃって…
…チキン…
おやぁ？
成長期って
やつですかぁ？
むにゅっ
もー…バカっｗ
先輩 練習の後
自主練に付き合って
もらえませんか？
オッケー！
でも本気でやるよ！
さ、練習
始めよ！
はいっ！
部活後——
先輩！
お願い
します！
ごめん！
ちょっとトイレ！
TOILET
ふ——…

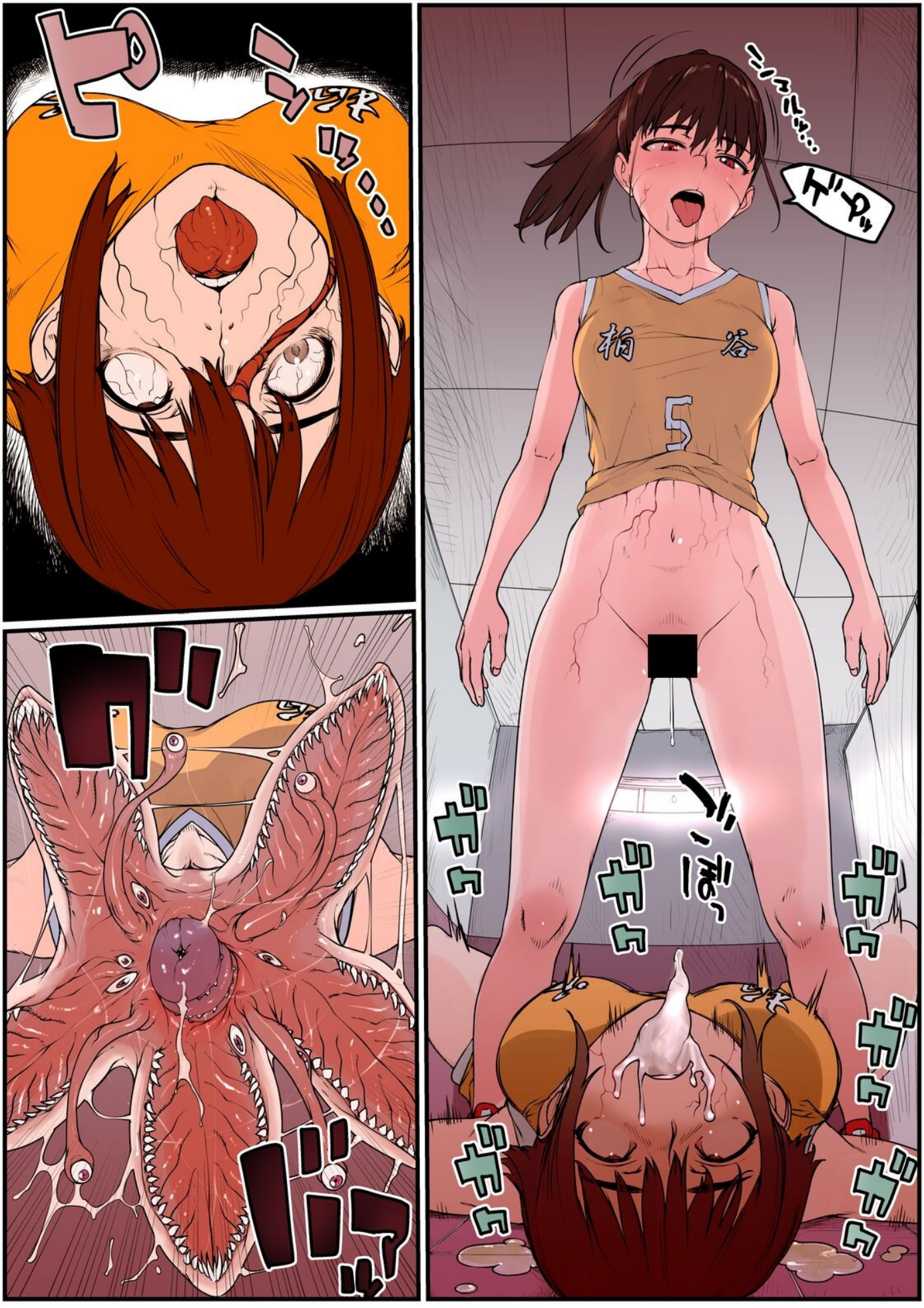
いつの間にか
空腹が収まってる…
は…
何だったんだろ…
楠谷
ちょろろろ…
ちょぴ
あ
ヤツにバレた
ヒーアット
ゼーハー
ゼーハー

先輩…遅いなー…
キィ…
せーんぱーい
柏谷
6
ILET
ぴき…
ぴきぴき…
先…輩？
あの…
ヤリッ
練習…
ドカッ
ゴンッ

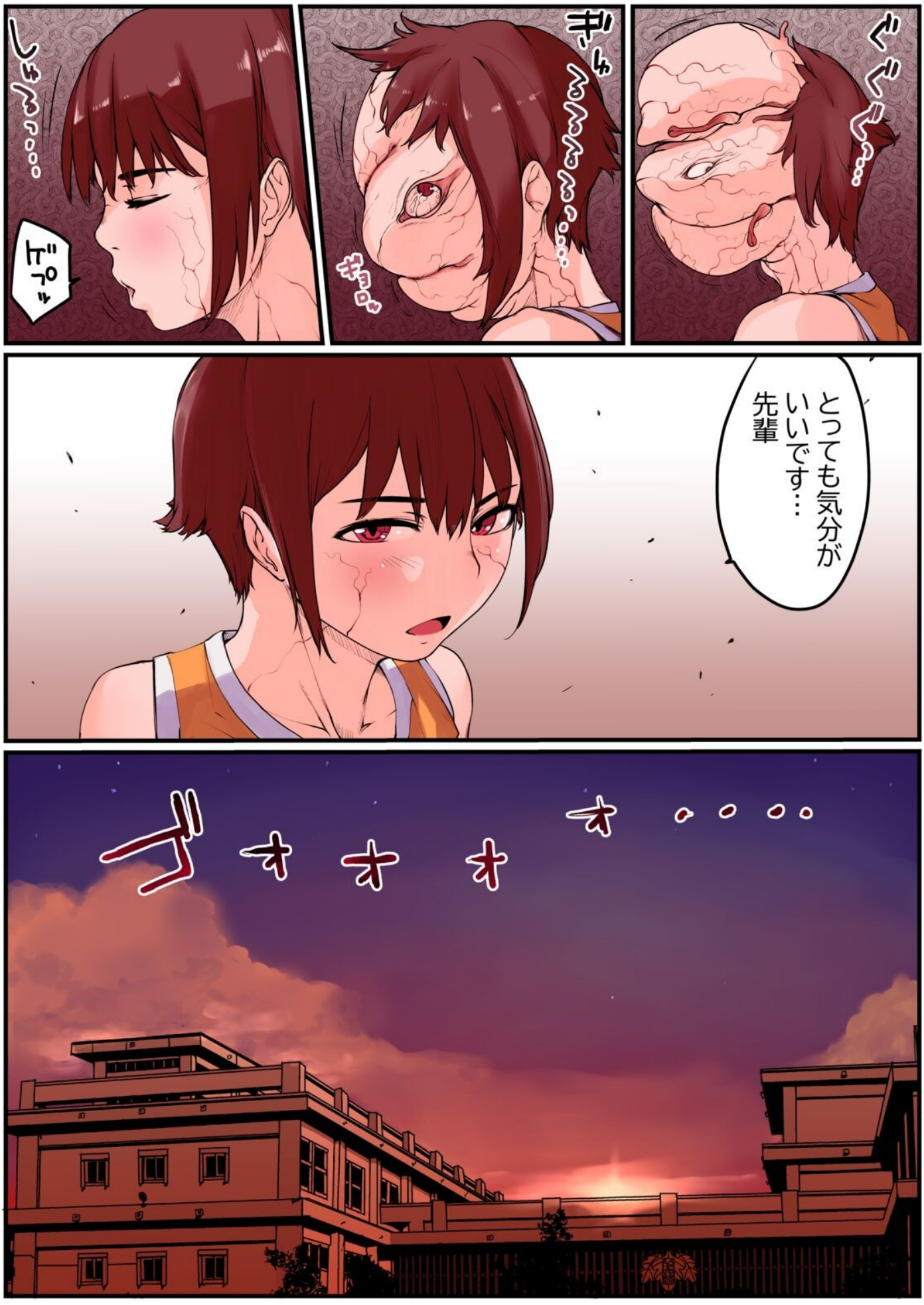

いっ…
たぁ…ッ
ピクン
ドクッ
ギリギリ
せ…
ヴェェアル
せ……ん…
ぱ…い……ッ

ズリリッ……
ひッ…
ひゅ～…っ
ひゅーーっ
……っ!!
ひゅーーっ
ひゅ～…
ひゅーー…っ
けぷりッ
ひゅーーっ
ゴギギッ…
バタッ
バタッ
ビッ!!
にゅるうぅぅーっ
バタッ
ズゥゥッ
ザボォッ
おぐっ

ズッ
ズボッ
ズボッ
ズボッ
ズボッ
ズボッ
ズボッ
ズボッ
ビクッ
ビクッ
ビク


ヒクヒク…
ドクッ
柏谷
5
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ
ヒクヒク…
ガ
バァ!!

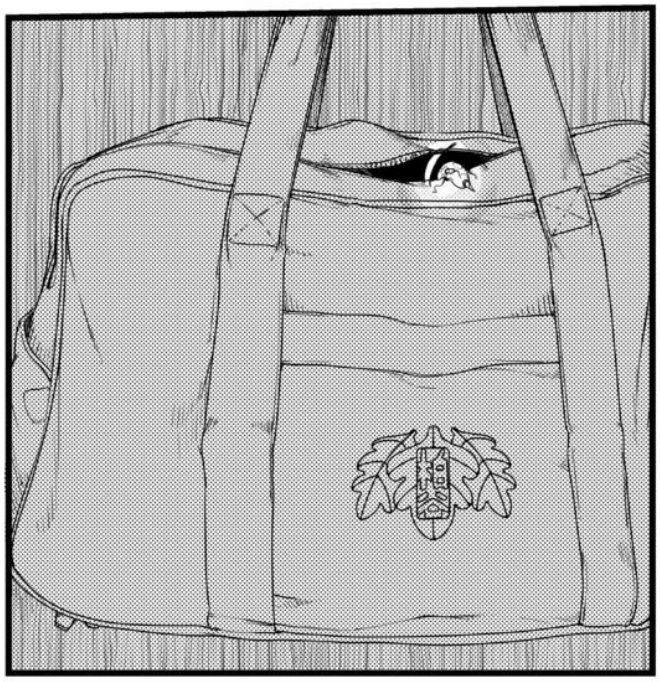
ジ――……ッ
む
ぱち
ぱち
ふぁ…
ヤメヤメ…
グググ…
ぱし、

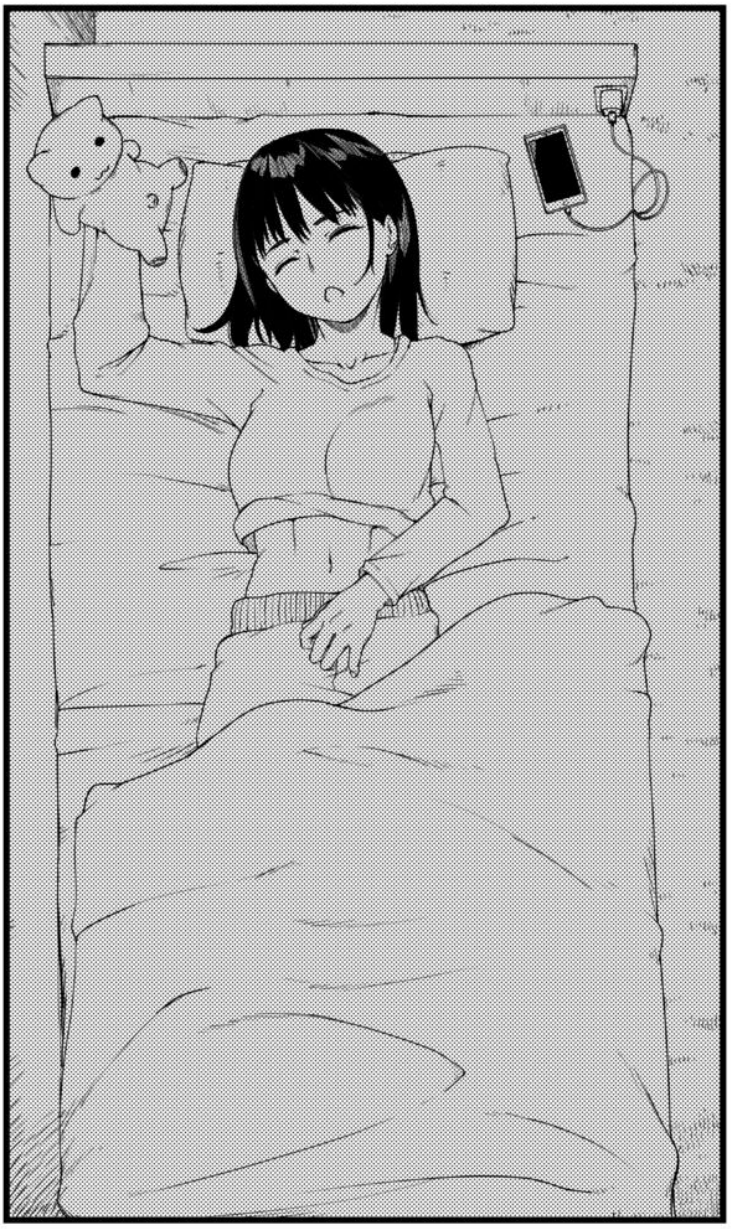

ぐぐぐ…
ぎゅるるるる…
ボロ…
しゅるる…
ゲプッ
とっても気分がいいです…先輩
ゴオオオオ…

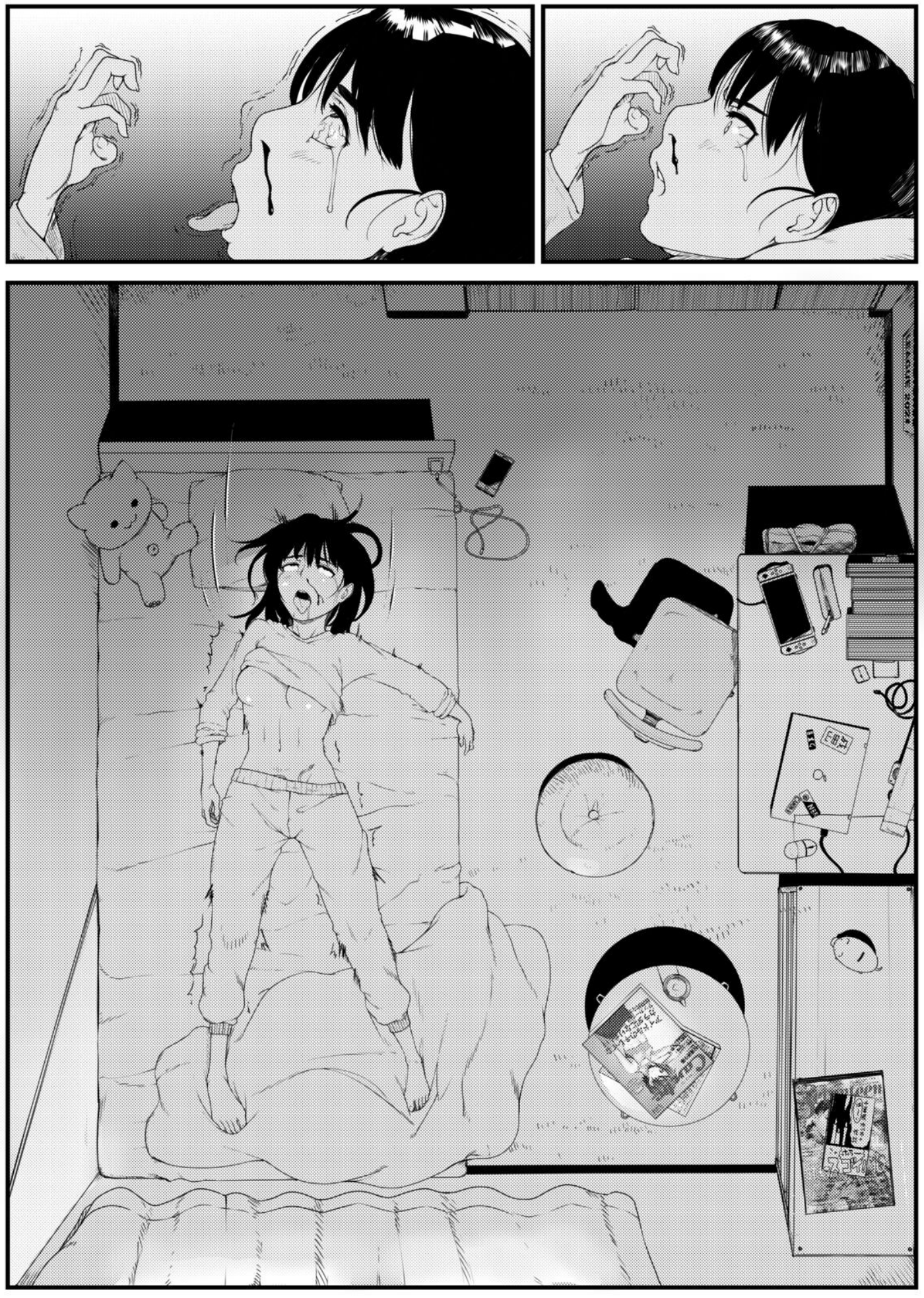
柏谷高等学校
女子バスケ
ゴキュッ
MY - PROTEIN
スゥゥカ…
ゴキュッ
ゴキュッ
ガンッ
ゴンッ
ギィィッ…
ガヤール
バタンッ

『蝕まれた花園 -Parasite School-』第 1 話
原作・スイレン　作画・湖月神無

Los Angels
BASKETBALL
LEAGUE 2021

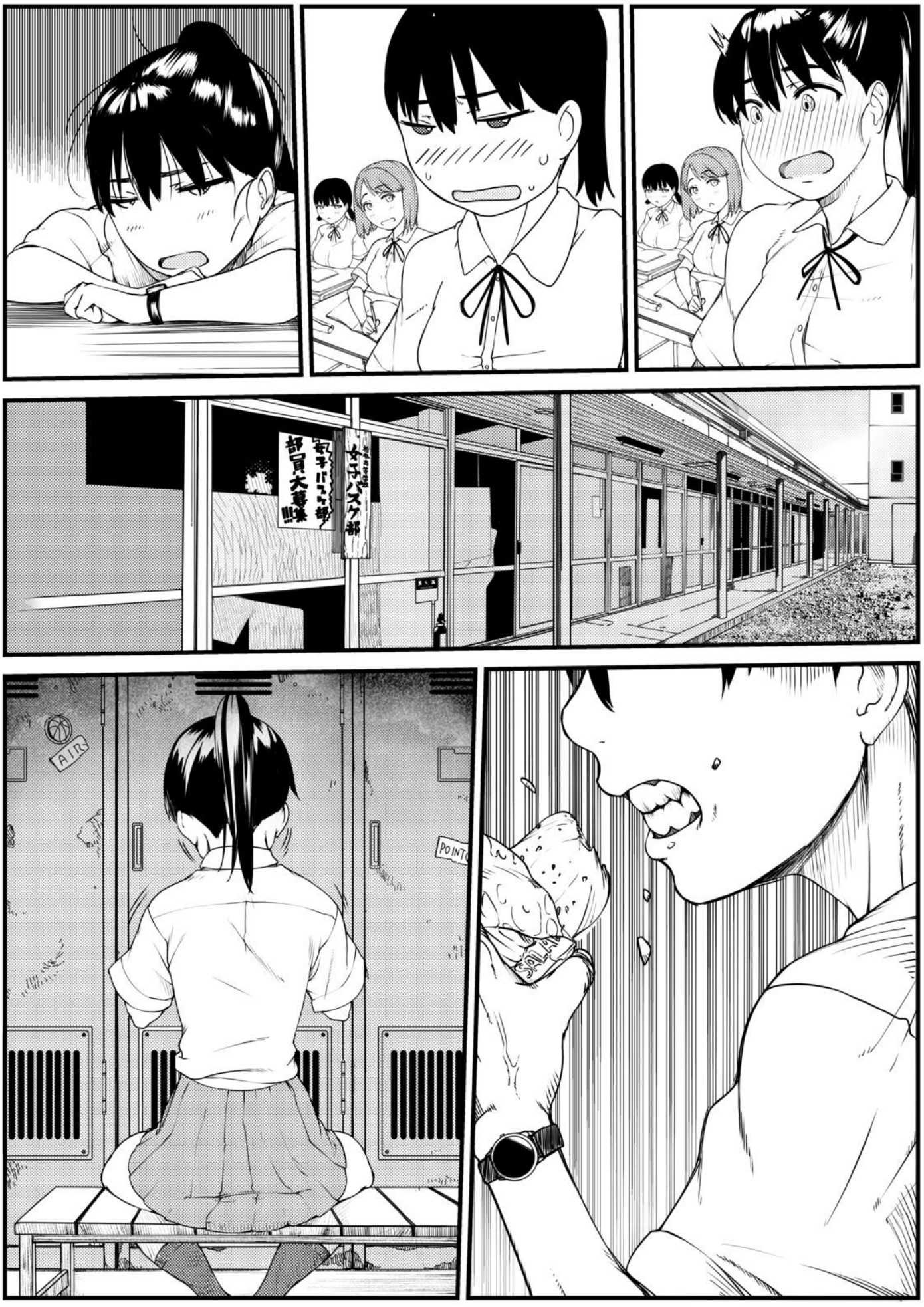






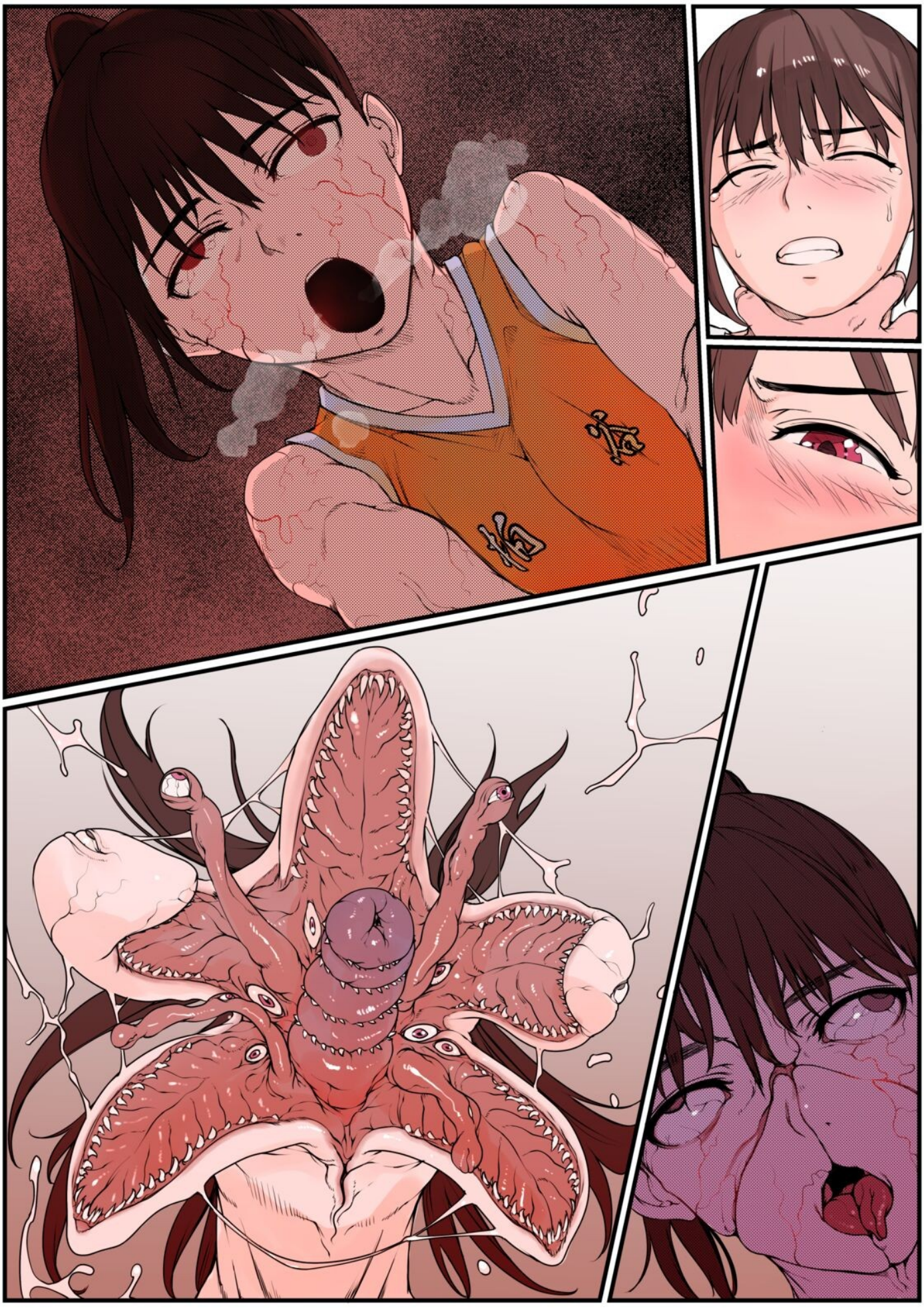
アラーム
5:30

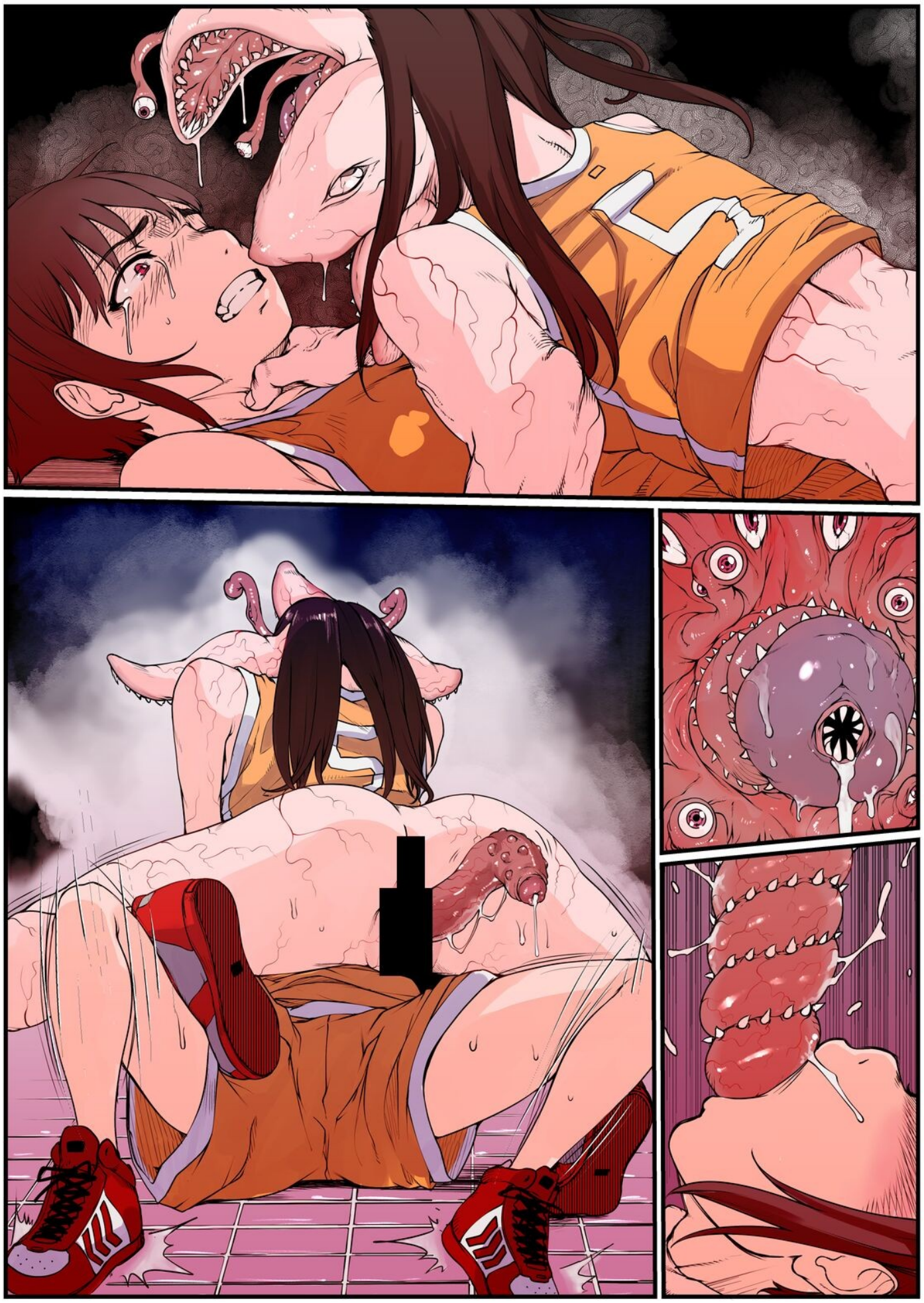
THREE&SEVEN
24h
SALAD CHICKEN

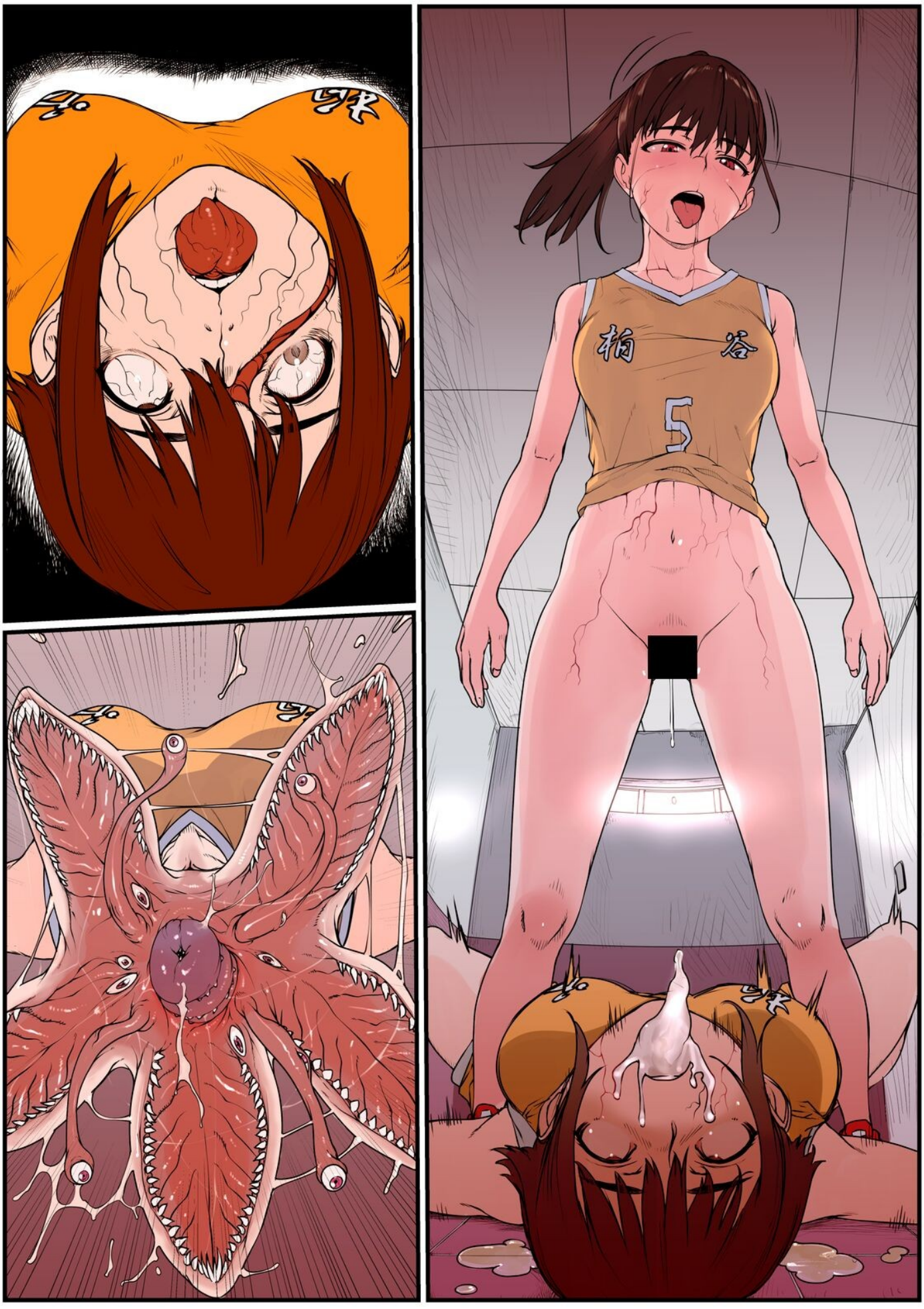

女子バスケ部
部員大募集
AIR
POINT

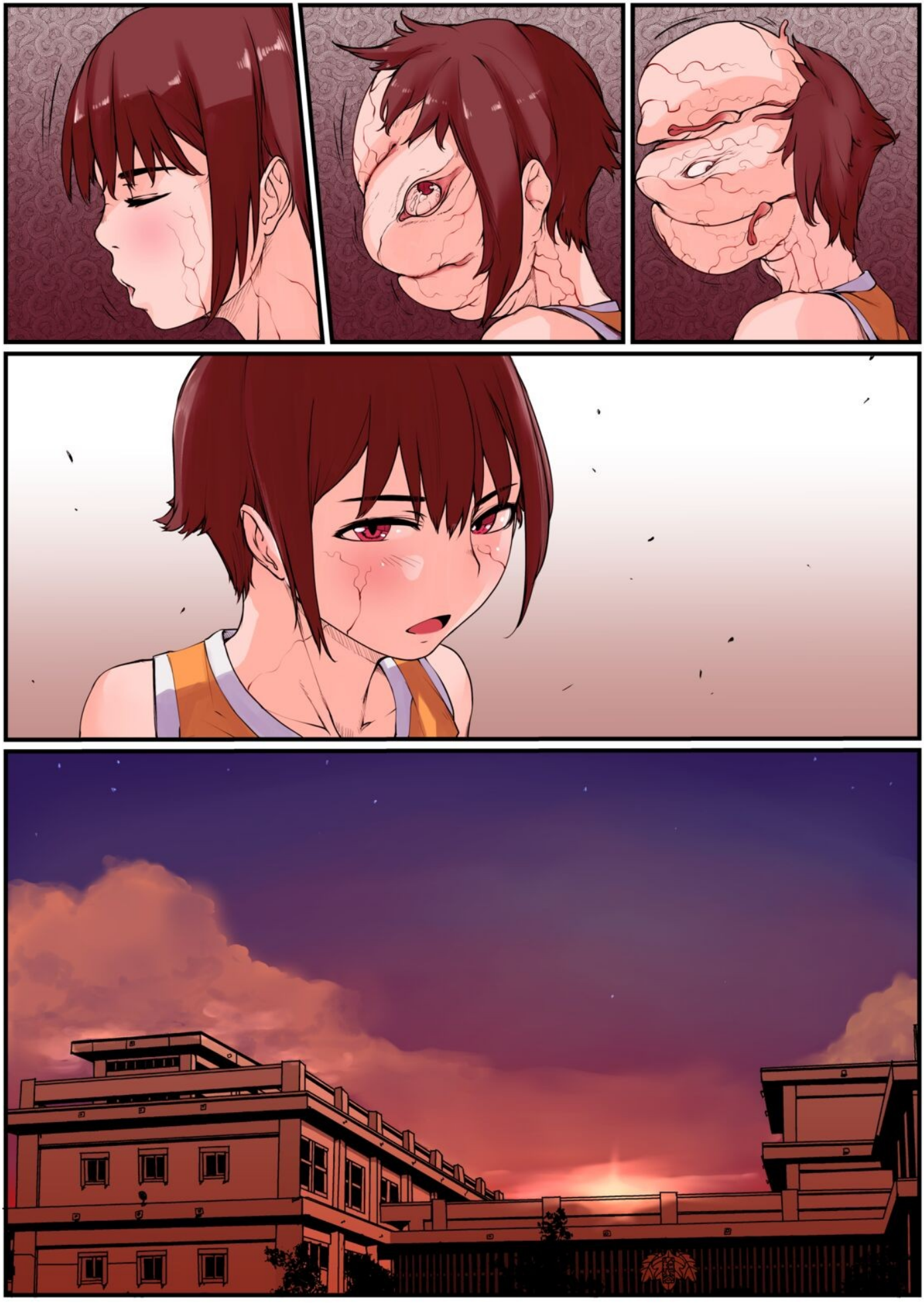
TOILET
6

ILET
柏 谷
6









MY - PROTEIN
柏谷高等学校
女子バスケ

私立柏谷女子高等学校。偏差値が高く、難関大学への合格者も多数出ている有名私立だ。可愛い子たちも多いと聞く、その高校に俺の妹である真央は通っている。幼いころから真面目な性格で、バスケットボール部に所属しながらも一生懸命勉強を頑張っている。おとなしいが健気で優しい性格ということもあり、人からも好かれていた。そんな妹を兄である俺自身も誇らしく感じていた。

「お兄ちゃん！朝ごはんできてるよー！」

朝、目をこすりながら、真央から呼ばれて１階へと降りた。キッチンでは、母が手際よく朝食を用意していた。

「おはよう、お兄ちゃん」

真央は笑顔で迎えてくれた。彼女の笑顔は温かく、心地よい。

「おはよう、真央。今日も朝早いな」

「うん、朝練があるから、早く学校に行くんだ」

「頑張ってるんだな。でも無理はするなよ？」

「ふふ。そうやってお兄ちゃんが心配してくれるだけで頑張れちゃう！」

真央がそう言ってくれると、なんだか嬉しくなる。兄として、彼女が笑顔でいてくれることが何よりの励みだった。

「そうだ。お兄ちゃん、大学の授業はどう？」

「大変だけど、学びたいことが学べて楽しいかな」

妹の勉強への興味津々な様子が微笑ましかった。真央は優しくて、おとなしい性格ながら、その一方でしっかり者で頼りになる存在だ。

「わたしもはやく卒業して大学に行きたいなあ…」

「お前なら、志望校に合格できるだろ。部活だけじゃなくて、毎晩勉強もやってさ…。俺のほうこそ、お前の様子を見ているだけで頑張れそうだよ」

真央はにっこりと微笑み、その後は朝食を楽しんだ。家族の温かい雰囲気に包まれながら、これからも彼女とこういうたわいもない会話が続くことを願わずにはいられなかった。

休日、大学の友達である拓海が家に遊びに来た。自室で気軽に過ごしていると、いつものように真央がお菓子と冷たいジュースをトレーにのせて持ってきた。

「お兄ちゃん、はいるね。はい、拓海さんどうぞ、お菓子とジュース召し上がってくださいね」

真央の声が軽やかに響き、拓海も微笑みながら礼を言った。彼女はちょっとした会話の後、何気ない笑顔で去っていく。その姿勢に、拓海が興味津々の様子を見せる。

「妹さん、真央ちゃんだっけ？可愛いな。しかも、気配りもできるんだ」

俺は微笑みながら頷く。

「そうだろう？真央はいつもこうだよ。」

拓海はジュースを飲みながら、

「俺の妹はもっと厳しいんだよ。こんな風にお菓子運んでくれたことなんて一度もないよ」

「それはそれで楽しいんじゃないか？」

俺は苦笑いしながら、茶化した。

「いやいや、きついよ。あいつには、可愛げが足りない…。真央ちゃんみたいな、ああいう気遣いができるって、素敵だよ。」

俺は真央のことを褒められて、嬉しい気持ちと共に誇らしさを感じた。

（そうだろう？真央は何でもできる妹なんだ）
内心でそっと自慢した。

楽しいの時間が過ぎ、拓海が帰るときには真央も見送りに来た。玄関先で、拓海が笑って言った。

「また来るね。真央ちゃん！」

「おま、うるさいなあ…！」

そんなやりとりを見て、真央は微笑んでいる。

「ふふ。気にせず、いつでも遊びに来てくださいね」

友人がいくら真央を褒めても、決して自分の妹は兄の友人とつながったりしない。そういう自信があった。それほど、真央を家族として信頼していた。

真央が部活から帰ってくると、その疲れた様子が伝わってきた。玄関で出迎えた俺は、心の中で思わず「大丈夫か？」と口に出そうになる。

「お疲れ、真央。今日も頑張ったんだな」

真央は微笑んで頷くものの、目元には疲労がにじんでいた。バスケットボール部の厳しい練習に耐える彼女の姿を見て、俺はどうしても心配になる。

「大丈夫か？疲れてない？いくらインターハイの予選が近いからって…」

真央は恥ずかしそうに笑った。

「ううん、大丈夫だよ。ちょっとだけ疲れたかな」

それでもなお心配な俺は、軽く彼女の髪を撫でてやる。真央は嬉しそうに微笑んでくれた。

「いつもありがとうね、お兄ちゃん」

「とにかくお疲れ様。でも、無理しちゃだめだぞ。体調管理も大事だからな」

真央はうなずきながら、返事をした。

「分かってるよ。でも、部活が楽しいから頑張れるんだ」

その真摯な言葉に、俺は妹の成長を感じる。高校生になっても、真央は変わらず優しく、そして健気だ。俺は胸がほんのり温かくなりながら、彼女の頭を撫で続けた。

「頑張ってる姿はすごく見てて心強いよ。俺はいつでも応援してるからね」

真央はにっこりと笑った。温和な表情を浮かべ、少し暗い雰囲気が抜けたようだった。前向きなこの性格が真央の良いところの一つだ。

大学構内で、俺と友人の拓海は昼休みに学食でくつろいでいた。ふと、以前話題にあがった妹の話を振ってみる。

「前に話してくれた妹のこと、最近どうなの？」

俺は興味津々で尋ねた。
拓海はにっこり笑うと、よくぞ聞いてくれましたと言わんばかりに話し出す。

「ああ。そういえば最近、妹が変わったんだ。前は愛想がなかったんだけど、最近はすごく優しくなってさ。見た目もなんか可愛くなった気がするんだ」

「そうなんだ。それはいいことじゃん。だけど、見た目も可愛くなったって、自分が良くしてもらってそう見えてるだけなんじゃないか？」

拓海はううん、と首を振りながら、

「いやいや、マジで可愛くなったんだって。なんていうかな、綺麗になったっていうか…？俺へのあたりも良くなって、最初はちょっと違和感があったけど、悪いことじゃないし。嬉しい変化だなって思ってさ」

「まあ、良かったじゃん。家族の関係がいい方向に変わるって、心強いよね」

自分と真央の関係を想像しながら、微笑んだ。
拓海は少し考え込むような表情を見せた後、

「そうだな。俺も姉弟仲がこうして変わっていくのは、なんか新鮮だし、嬉しいね」

友人の家族の雰囲気が良くなったと聞いて嬉しいし、なんだか拓海も晴れやかな様子だ。世間には暗い話題も多いが、こうやって小さな幸せを見つけるとホッとする。

平日の夜８時過ぎ、玄関のドアが開く音が響いた。真央を出迎えた俺は、すぐにその様子が気になった。

「おかえり。今日はなんだか…元気そうだな」

「ただいま。そ、そう？だいぶ体力がついてきたのかなあ…」

ここのところ、インターハイの予選大会に向けた練習で、かなり疲れている様子だった。俺は俺なりに、妹をサポートしてきたつもりだった。それとも彼女自身の努力がやっと実を結んだのだろうか。

「そういや、今日は先輩と特訓したから遅くなったんだろ？」

残って練習をするから遅くなると、事前に連絡があった。こういうやりとりを気にせずしてくれるのは、真央の良いところだ。その付き合ってくれた先輩もそういう真央の良さを汲んでくれているのだろう。

「そうそう。おかげでこんな遅くなっちゃった…ごめんなさい」

「いいんだよ、謝らなくて。元気そうだしさ。そういや特訓って、何をやったんだ？」

俺は何気なく真央に聞いた、その瞬間、微妙な表情に変わったが、すぐに笑顔に戻る。真央が微笑むと同時に、彼女の瞳には何か異変を感じる。一瞬、俺はその視線に引き込まれたような気がしたが、すぐにその感覚は消えてしまった。

「いや、ただの練習だよ」

「そうか…でも、やっぱり…なんかキレッキレだし」

言葉に詰まりながらも、俺は真央の変化を確実に感じ取っていた。彼女の姿勢や表情は、まるで別人のようだ、とは言いすぎだが、それほどだった。

「…本当に大丈夫なのか？」

心の奥底で疑問符が浮かぶ中、真央は頷きながら言った。

「大丈夫だよ、何も心配しなくても。でも、お兄ちゃんがそうやって心配してくれて嬉しいな」

彼女の声や態度に、どこか控えめながらも堂々としたものが漂っているように感じられたが、確かに兄の心配する様子を見てほほ笑む、いつもの真央だ。

その翌日も真央は元気いっぱいだった。彼女の活力に、俺は一抹の違和感を感じつつも、姉弟の絆を優先し、黙って彼女の変化を見守ることにした。

あの日以来、真央は元気になった。確かに前から明るい性格だったが、ここ最近ははつらつとしている。部活から帰宅した時もそこまで疲れたそぶりは見せない。
そんな中、ほかの変化も表れ始めた。時折、夕飯の準備を始めた母の様子を見つめている、というよりも台所に並べられた肉や卵をひそかに観察しているのだ。そして微妙な表情で何かこらえるように喉を鳴らしていた。俺は、それが何かのサインなのか気になりつつも、直接聞く勇気が出なかった。

「真央、今日はどんな一日だった？」

「うん、特に変わったことはないよ。」

真央は微笑みを浮かべながら答えた。しかし、何かを隠しているような気がして、心の中でなんとなく不安を感じた。だが、それが具体的に何なのか理解できず、気まずい空気が部屋に広がった。

夕飯の支度が始まり、母が用意した料理の香りが家中に広がる。真央は目を輝かせ、ちょっと興奮しているようだった。しかし、母や父は特に気にしていない、というより気づいていないようだった。そんな中、俺だけは怪訝な気持ちを抱えつつ、何も言わずにテーブルに座った。

母が料理を運んでくると、真央は目を輝かせながら興奮気味に「おいしそう！」と言った。そして食事中、やたらとから揚げや卵焼きをほおばっていた。気持ち、噛む回数も少ないように感じた。

「真央、そんなに肉好きなのか？」

尋ねると、真央はにっこりと笑って答えた。

「うん、最近特に。美味しいんだよね」

その言葉に家族は微笑みながら食事を続けた。母も「元気なら何でもいいわ」と笑顔で応じていた。だが、俺自身は依然として、戸惑いを感じていた。心の中では、ここ数日の真央の食欲が気になっていた。しかし、部活で練習が激しいことを考えると、おそらくは体力をつけるためだろうと納得しようとしていた。

「真央、バスケの練習って相変わらず大変なんだな」

そっと話しかけると、真央はうなずいた。

「うん、でも楽しいから全然苦じゃないよ」

その言葉に俺はほっとした。彼女が楽しんでいるなら、それでいいと思った。

深夜、何気ない夢から目を覚ました俺は、水を飲もうと暗いダイニングに足を運んだ。床のきしむ音が静かな夜に響き渡る。すると、キッチンから物音がした。すでに先客がいるようだ。そっと足を進めると、そこには差し込む月明かりに照らされる真央が佇んでいた。キッチンのカウンターに立ち、手に持っていたのは、部活で使っているシェイカーだ。それを口につけ、がぶ飲みしていた。豪快にゴクゴクと音を鳴らしているその様をみて、なぜか俺は物陰に隠れた。そして飲み干すと同時に真央は、

「グォオエエッ！」

大きなゲップを漏らした。あんな姿を見たことがなかった俺は、眉をひそめながらもじっと様子を見る。

「ん一、美味しい」

そうつぶやくと、彼女は満足げに微笑んで、シェイカーをゆすいでシンクの横に置いた。そしてキッチンを後にして自分の部屋に戻っていった。

「…な、なんだったんだ？」

キッチンに近づくと、そこにはやはりプロテインが入っていたであろうシェイカーが置いてあった。なぜこんな時間に飲んでいるのか謎だったが、眠気も相まって深く考えるのはやめた。目当ての水分を補給し、さっさと部屋に戻り、睡眠に戻ることにした。

翌朝、朝食を取りながら、目の前の光景がフラッシュバックする。シンクに目をやると、昨夜のシェイカーが洗われた状態でポツンと置かれていた。

「なんだったんだろう…」

頭に湧き上がる疑問とともに、背筋に寒気が走った。真央の微笑み、がぶ飲みする様子、そして不自然なゲップ。一つずつの出来事が合わさり、心の奥底にもやもやしたものが生まれる。

「おはよー！お兄ちゃん！」

「お、おう。おはよう」

真央が元気よく現れた。なんてことはない、いつもの妹。その様子を見て、昨夜の夢うつつの中に抱いた違和感は消え去っていた。

休日の昼下がり、自分の部屋で一人ぼーっとしていた俺は、ここ数日の真央の様子を振り返る。部活に慣れて来たのか、疲れを見せることが減り、それに伴う形で食欲旺盛になった。ときどき、家でプロテインを飲み、そのせいかゲップを恥じらうことなくするときもある。
気になった俺は、拓海に思い切って相談してみた。すると…

「え？真央ちゃんがゲップを？」

「そうなんだよ。最近部活で頑張ってるおかげか、プロテインとかよく飲んでてな。そのときにちょっと大きめにするんだよ」

俺も自分なりに理由を考えて、真央の行動に正当性を持たせようとしていた。しかしそれでもひっかかっているのも事実だった。すると拓海は、何か思い出したように切り出したのだ。

「あー。それ、うちの妹もだわ。気になって俺、聞いたんだよ。なにしてんだって」

拓海の妹も同じだったこと、そして直接聞いたことに驚いていた。

「なんか有名なインフルエンサーの女子がやってるらしくてさ。見てみたんだけど、サバサバ系ってやつ？俺は良さが分からなかったけど、そういうのを隠さない感じが今女子の間で流行ってるんだってさ。真央ちゃんのまわりでも同じなんじゃないかな」

と、そういう理由を拓海から教えてもらったのだ。俺もその流行りは理解はできなかったが、合点はいく。そして彼はこう付け加えた。

「…まあ、あんまり詮索したり人に話すもんじゃないよ。真央ちゃんのためにも、さ」

確かに拓海の言うとおりだ。いくら仲が良いとはいえ、あまり干渉しすぎてはいけない。年頃の女の子だということをたまに忘れてしまう。

真央に変わったところが出始めたのは事実だが、それ以上に明るく元気になったし、毎日が楽しそうだ。そんな姿を思い出すと、細かいことを気にしていることが馬鹿らしく感じてきた。そのとき、ドアをノックする音が聞こえた。

「ねー、お兄ちゃん。ちょっといい？」

「おう」

返事をすると、お洒落をした真央がはいってきた。かわいらしい服に身を包み、気持ち気合の入った化粧をしていた。それを見たとき、

（真央って、こんなにスタイル良かったんだな…）

家族とはいえ、自分の妹の身体をまじまじと見ることは少ない。しかし改めてみると、高校生から始めたバスケで鍛えられた身体は引き締まっており、可愛い妹から一人の女性へと変わっている片鱗を受け取った。

「ど、どう…かな？」

ただこうやって照れながら、俺に聞いてくるその様子は、昔から同じ可愛い妹だ。

「似合ってるよ。どうしたんだ？」

「いや、先輩からこういう風におしゃれしたら似合うよって言われてね」

部活の先輩の話はよく聞く。真央のことを可愛がってくれているらしい。バスケのことだけではなく、こういう男の俺にはできない面倒も見てくれているようで、寂しいようでありがたいような気持ちだ。

「いいね。女子高じゃなかったらクラスの男子から告白されてるかもな」

「えぇえ！？うるさいなあ！…ふふ！」

満更でもない顔を浮かべる真央が可愛かった。

「それで、今日はどこか行くのか？」

「うん。その先輩とお昼ご飯に行くことになってね」

「そうか、いってらっしゃい」

温かく晴れた日の昼。楽しそうな真央を見た俺は、前まで考えていた異変なんて忘れていた。

蝕まれた花園
-Parasite School-

原作・スイレン　作画・湖月神無

全１６頁（前半：モノクロ 後半：カラー）

第１話
柏谷
6
6
蝕まれた花園
-Parasite School-
全１６頁
（モノクロ８頁・カラー８頁）

第２話
製作決定！
蝕まれた花園
-Parasite School-

笹山 美紀

４月８日生まれ、高校３年生のバスケットボール部部長。
明るく元気な性格で運動神経抜群。人をまとめるリーダーシップも持つ。恋愛には興味がなく、彼氏ができたことは一度もない。
一人っ子。

伊村 真央

８月２１日生まれ、高校２年生のバスケットボール部部員。
温和で真面目な性格。学力では成績上位だが、運動はそこまで得意ではない。しかし努力を惜しまず、日々部活を頑張っている。兄が１人いる。

私立柏谷女子高等学校

千葉県にある普通科の私立女子高校。旧帝大や有名私立大学に合格する生徒を多数輩出している。校則は最低限に留められ、生徒たちの良識に委ねている。
校舎はメンテナンスが行き届いており、視聴覚室などの様々な部屋はもちろん、体育館やプール、部室棟などの施設も充実している。数多くの魅力があることから、毎年たくさんの受験生が集まる。
毎年、秋には柏谷祭と呼ばれる体育祭と文化祭が連日開催されるイベントがある。

内容物

１．本編

全１６P、台詞や効果音が含まれた本編です。

２．文字無

1. 本編の台詞や効果音なしのものになります。イラスト・描写をお楽しみいただけます。

３．おまけSS

SNSにて公開したものです。内容は作中の登場人物、真央の兄からみた妹の様子を描いてます。

４．etc.

商品のサムネイルやアイコンなどをまとめています。

2024/5/24